駿建 2018 Jan. vol.45 No.4　日本大学理工学部建築学科　日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of
Department of Architecture. College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design. Nihon University Junior College

SPECIAL FEATURE

世界を旅して考える

SPECIAL FEATURE

世界を旅して考える

表紙：オスカー・ニーマイヤー設計によるブラジリアの国会議事堂
P２、３：オスカー・ニーマイヤー設計によるブラジル外務省

建築を好きになって、もっとも楽しいことのひとつは、建築物を見ること。
しかも、それが海外の建築物だとしたら、
そこには常に大きな違いや驚きがあるものです。

建築は、その土地のさまざまな環境に反応して
建ち上がるものなので、たとえ同じプログラムの建築物があったとしても、
日本のそれとは異なります。だから、簡単にコピーなどはできません。

だったら、ただ見るだけなの？　いいえ、そうではありません。
どうしてそのようにつくられたか、という
世界にある“建築に対する考え方”には、大きく学ぶべきポイントがあります。
それは建築のどの分野にでも言えることなのです。

今回は５名の先生と４名の在学生に寄稿いただきました。
どの国のどんな都市へ行って、どんなことを想い、何を考えたのか。

皆さんも学生時代の間に、できるだけ世界の空気を吸ってみてください。
そこには、見たこともない楽しい建築の世界が広がっているはずです。

佐藤光彦先生は、日本から飛行機を乗り継いで25時間、地球の裏側にあるブラジルへ。
そこには私たちの知らない都市と建築の歴史がありました。

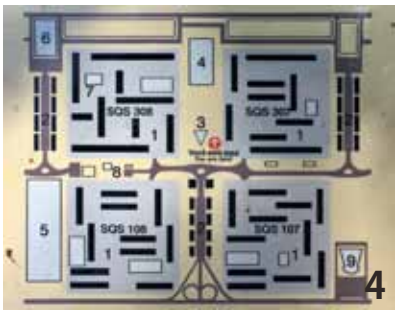
TRAVEL 1

ブラジル - ブラジリア、リオ・デ・ジャネイロ、サンパウロ

ブラジル もうひとつのモダニズム

1 出典＝『首都ブラジリア モデルニズモ都市の誕生』著：中岡義介・川西尋子、鹿島出版会、2014

3



4

text＝佐藤光彦 教授

2017年の春、ブラジルの３つの都市を巡る旅をしました。

ブラジリアは、近代都市計画の代表例として、建築を学ぶ学生であれば誰もが知っているでしょう。1960年、ブラジル高原の未開の地に、**ルシオ・コスタ**の計画によって、飛行機あるいは翼を広げた鳥のような姿の首都（図１）が忽然と誕生しました。主要な公共建築は**オスカー・ニーマイヤー**による設計です。1987年、開都して30年にも満たずに世界遺産に登録された近代都市は、現在どのような姿になっているのでしょうか。ブラジリアの建設を指揮した大統領の名を冠したクビシェッキ国際空港に降り立った私たちを最初に迎えてくれたのは、宿泊先である**ブラジリア・パレス・ホテル**でした（写真２）。ピロティの上に浮かぶ客室、強烈な日差しをコントロールするルーバー、独立した階段室の造形、近代建築の基本言語でつくられた単純な構成の建築のなんと優美なことか。ここからブラジルのモダニズム建築の洗礼がはじまりました。

ブラジリアの居住エリアの基本構成は、教会と商店街を中心とした４つの街区からなっており、各街区にはル・コルビュジエのユニテ・ダビタシオンのようにピロティで支えられたスラブ状の住棟が、かなりの密度で縦横に建ち並んでいます（写真３～５）。住棟はルーバーやテラスで日射が調整され、街区によってそれらのデザインが異なることで単調さを回避しています。また特徴的なのは、地面から一段上がったピロティの床がタイルや石で覆われ、いずれもがピカピカに磨き上げられていることです。それらはまるで日本建築の縁側のような中間領域として、周囲に生い茂る熱帯の巨大

2

7

8

9

10

な樹木と居住空間の間を調停しているようにも感じられました。ニーマイヤーの**ブラジリア大学本館**（写真６）は、ブラジリアの都市計画と相似形のようなプラン（平面図）をしています。整然と並ぶ壁柱によって構成される空間は、古代遺跡のような静謐さと開放的なおおらかさが同居するキャンパスを形成していました。人工的で無機質な都市計画の極致と思われがちなブラジリアですが、モダニズム建築と熱帯の植生の組み合わせの中で、実に豊かな都市空間が形成されていることに驚かされたのでした。

リオ・デ・ジャネイロは、ブラジルで最も歴史のある都市のひとつで、ブラジリアに遷都する前の首都でした。ヨーロッパのような石畳に古い建築が建ち並ぶ旧市街や、コパカバーナ海岸のような国際的観光地がある一方、急激な人口増加によって都市部から溢れた低所得者が山の斜面を不法占拠してできた、ファヴェーラと呼ばれるスラムが多数存在することでも有名です。その中でも最大規模の**ホシーニャ**というファヴェーラを訪れました（写真７～10）。斜面にへばりつくように密集する無数の住居群は、一見無秩序ですが、斜面を蛇行して登る車道とそれらをつなぐ路地といった一定の構造の上で、部分と部分の連鎖によって全体ができあがっています。また、これらの建築はすべてRCラーメン造の躯体と中空レンガの壁によってできているので、構造と構法から見れば近代建築の集合体であるとも言えます。同じ遺伝子のもとでさまざまに成長した、近代建築という種の多様な形態を見ているかのようです。ファヴェーラは治安が悪く、麻薬をはじめとしたさまざまな犯罪の温床となっていたため、そのクリアラン

5

6

11

12

ス計画が何度も立てられましたが成功せず、現在ではその住空間とコミュニティのあり方を積極的に評価しながら、環境を改善していく方法が模索されているようです。

サンパウロは、南米の経済の中心地のひとつとなっている豊かな都市で、ブラジルを代表する建築家たちの優れた作品が数多くあります。ニーマイヤーの**イビラプエラ公園**（写真11）は、点在するさまざまな文化施設をつなぐ有機的な形状のRCの屋根が、低く垂れ込めた巨大な雲のように公園の中央を覆い、見たこともないランドスケープが出現しています。**リナ・ボ・バルディ**の**現代美術館**では、巨大なボックス梁によって地上は広大な広場となり、持ち上げられた無柱の展示空間には古今東西の名画や彫刻が浮かぶように展示されています（写真13）。コンクリートのマッスが空中を横切る**パオロ・メンデス・ダ・ロカ**の**彫刻美術館**（写真14）は、建築そのものが巨大な彫刻のようでもあります。**ヴィラノヴァ・アルティガス**の**サンパウロ大学建築学科棟**（写真12）は、格子梁による大空間を囲むように、さまざまな種類の活動の場が設えられています。このような空間で建築を学べることに羨望の念を禁じえませんでした。

ブラジルの建築に共通しているのは、モダニズムの基本言語から展開したRCの構造と造形のバリエーションの豊かさです。そして、そこで生き生きと振る舞う人々の姿が実に印象的でした。モダニズム建築は、世界中に同じ空間（ユニヴァーサル・スペース）をつくるものとして、その弊害が現在では否定的に評価されています。そのような一面があることも事実ですが、モダニズムが生まれた欧米とは全く異なる気候風土の地で、これほどまでに豊かな空間が花開いていることをどのように捉えたら良いのかを考えさせられます。

モダニズム以降の20世紀の建築史は、前の世代がつくり上げたものを否定し、差異化することの繰り返しであったとも言えます。しかしながら、現在最先端で活躍する建築家たちの仕事を見ると、モダニズムの可能性をもう一度見直すところから新たな可能性を見出そうとしている側面もあるように思います。その中で、ブラジルの建築をあらためて見直す傾向が見られます。たとえば**SANAA**や**OMA**などの建築家たちは、ずいぶん前からニーマイヤーをはじめとするブラジルの建築家たちの仕事を参照してきました。サンパウロ現代美術館の展示デザインやイビラプエラ公園の雲のような屋根などは、参照元としてわかりやすい例でしょう。近年、日本でもニーマイヤーをはじめとするブラジルの建築を紹介する展覧会がいくつも開催されています。

ブラジルの都市と建築は、私たちにとって、平行世界であり、可能世界であると言えるのかもしれません。

さまざまな都市や建築を巡ることは、私たちに新たな気付きを与えてくれます。建築はレファレンスなしに考えることはできません。どうぞ教室を出て、たくさんの旅をして建築を見てください。

13

14

大学教員になってから海外へ出る機会が増えた宮里先生は、
この１年間に地球２周半!!!も出張。どんな国へ行っているのでしょうか。

TRAVEL 2

ドイツ・ハンブルグ｜アメリカほか

いろいろな海外報告

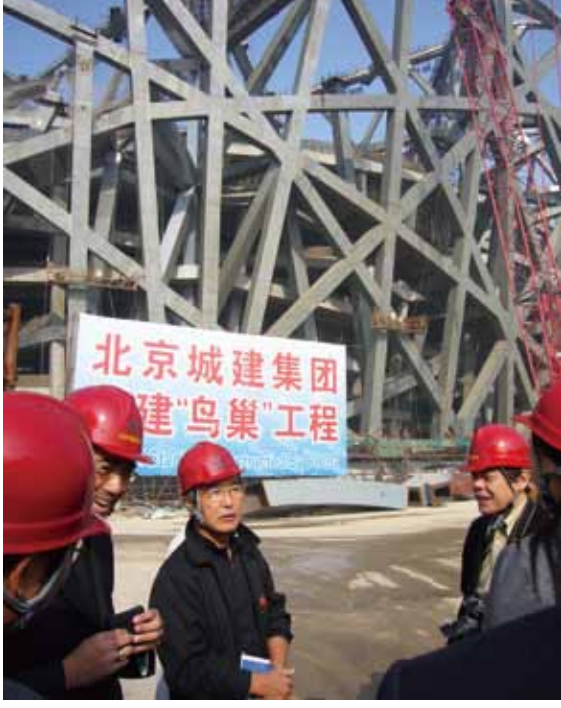
text=宮里直也 教授

私が所属する国際シェル空間構造学会(IASS)は、1959年に空間構造の第一人者である**E.トロハ**を会長として設立されました。毎年、シェルと空間構造に関する国際会議が世界中のどこかで開催され、2017年はドイツのハンブルグで34ヶ国から550人が参加して開催されました。

通常、国際会議では約10ヶ月前からアブストラクトと呼ばれる抄録を「投稿」→「審査」→「採択」→「フルペーパーの論文投稿」→「審査」→「採択」と進み、最終的に「論文発表」となります。皆さんも大学院まで進むと、国際会議で発表する機会があるかもしれません。一昨年の東京大会では大学院生２名が、去年は卒業したばかりの元大学院生が英語で論文を発表しました。国際会議では、Coffee Breakと呼ばれる比較的長めの休憩時間（30分ほど）が設けられています。これは年に一度、世界中の研究者が集まり、チャットするための時間であり、非常に熱気に包まれます。また、テクニカルツアーと呼ばれるその都市の話題の建築や施工中の現場を見学するツアーも開催され、普段個人では入ることができないような場所を見学することもあります。

各企業の第一線で活躍する人たちが集まって視察団を結成し、海外視察を行うこともあります。例えば、2020年の東京オリンピックの建設に向けて、リオ・オリンピック2016やブラジル・FIFAワールドカップ2014の施設を視察するために、2014年の夏に南米視察団としてブラジルへ行きました。視察団は、見学のみならず寝食を共にしますので、帰国後も仕事以外で交流が続くことも多いです。また視察団のツアーでは、少し足を伸ばして建築以外の大自然などを視察することもあります。

最後に、アメリカでの長距離ドライブでの思い出を紹介します。カーナビから聞こえてきた英語のアナウンス「次は400km先を右へ」に思わず耳を疑い、ボタンを押して聞き直し、日本とアメリカのスケールの違いに、思わずひとりで笑ってしまったことを今でも覚えています。グーグル・アースやストリートビューをはじめ、世界中のさまざまな情報がそこへ行かなくても簡単に手に入ってしまう時代ですが、やはりそこへ行って、見て、触れて、嗅いで、感じるに勝るものはありません。皆さん、海外に限らず、国内でも、都内近郊でも、どんどん出かけましょう。



北京オリンピック・メイン会場の「鳥の巣」の工事現場。見学禁止の厳戒態勢の中、工事中のフィールド内まで入って見学した。

2006年の視察団で訪れた莫高窟（ばっこうくつ）で有名なシルクロードの分岐点として栄えた敦煌。風が吹くと音を奏でる「鳴沙山」。

上：ドイツ・ハンブルク大学で、英語で発表する菱木晶士君(ナカノフドー建設、2017年修士修了)。
下：ブラジルとアルゼンチンの国境に位置する世界三大瀑のひとつと呼ばれる「イグアスの滝」。数キロにも及ぶ滝幅があり、ナイアガラの滝とは比べものにならないスケール。

３つの国際現代美術展が同時開催となるのは10年に一度のこと。
2017年夏、佐藤慎也先生は３つの都市を一気に巡りました。

TRAVEL 3

イタリア・ヴェネツィア｜ドイツ・カッセル、ミュンスター｜イギリス・ロンドン

これからの美術館を探す旅

text= 佐藤慎也 教授

ドクメンタの元郵便局を使ったノイエ・ノイエ・ギャラリー。さまざまな人たちが熱心に展示を見ている。

日本各地で開かれている芸術祭ですが、世界的には３つの国際現代美術展が有名です。2017年は、これらが同時に開催される10年に１度の年であることから、ヨーロッパをまわる旅を計画しました。それは同時代の美術を巡る旅であり、その結果をこれからの美術館の建築計画に反映させたいと思いました。今回は、その旅の一部を紹介します。

最初は、２年に１度開催される**「ヴェネツィア・ビエンナーレ」**。会場には国別のパビリオンが並び、代表として選ばれたアーティストたちの展示が行われます。日本館もあって、**吉阪隆正**の設計で有名です。しかし今回の展示では、建築が信用されていないためか、パビリオンへ大胆な変更を加えて使っているものが多く見られました。例えば、金獅子賞を受けたドイツ館では、内部に高く持ち上げられたガラスの床がつくられ、そのために正面の入口を使うことができず、側面に設けられた階段を上って中に入らなければなりません。他にも、グレーチングによる斜めの床を設置したブラジル館、正面の入口が塞がれたアメリカ館、内部に音楽ホールを入れ子状につくったフランス館など、いずれも建築は計画どおりに使われていません。極めつけは、屋根がほとんど壊され、廃墟のような建築から水が噴き出していたカナダ館（写真１）。もはやサイトスペシフィックなインスタレーションをつくるアーティストたちにとって、建築そのものを疑うことからはじめないと、これまでの展示との違いを生み出すことが難しいのでしょう。

また、作品の中に人を含み込むものがいくつか見られました。例えば、ドイツ館では定期的にパフォーマンスが行われ、それ以外のときは痕跡だけが展示されています。他にも、アーティストが展示室をスタジオにして毎日滞在する作品や、アーティストたちと鑑賞者の対話が行われる作品など、人がその展示空間に存在することによってはじめて成立する作品が多くありました。もはや今の美術は、モノだけを展示するだけではなくなり、人によって生み出されるコトも展示されるため、これまでとは異なる展示空間が必要とされているようです。

次が、５年に１度開催されるカッセルの**「ドクメンタ」**。毎回ディレクターが変わり、展覧会全体が重厚なテーマを持っています。美術館以外も展示場所に使われ、鑑賞者はマップを見ながら街中をまわります。作品と同時にその場所を見るという仕組みは、日

ヴェネツィア・ビエンナーレのカナダ館。屋根はほとんど壊され、パビリオン全体がインスタレーション作品となっている。

ミュンスター彫刻プロジェクトの川を渡る作品。底上げ

ミュンスターの市庁舎。人による彫刻と呼ぶべきパフォーマンスが繰り返される作品。

テート・モダンに新しくつくられた、対話のための場所となるテート・エクスチェンジ。

本の芸術祭とほとんど変わりがありません。第二次世界大戦中にナチスの戦車を製造していた巨大な工場跡や、廃線となった地下鉄駅も会場に使われ、ドイツやカッセル、その建築の歴史、さらに現代を理解していないと、展示された作品をきちんと理解することはできません。一方で、もっとも興味深かったことは、街の人たちがそんな作品を見ている様子でした。どの会場でも、日本ではあり得ないほど多様な老若男女が、作品をめぐって熱心に話し合っているのです（写真２）。難解な作品が膨大に展示されているため、２、３日ではすべてを見ることができません。何度も入ることができるチケットを持って、彼らは少しずつまわっているのでしょう。世界のアートファンに向けたものであると同時に、この展覧会は街の人たちのものでもあるようです。

最後が、10年に１度開催される**「ミュンスター彫刻プロジェクト」**。すべてを無料で見ることができるため、ドクメンタ以上に街の人たちと近いところで行われています。1977年に開始され、今年でまだ５回目ですが、40年前から10年ごとにつくられてきた作品が、コレクションとして街に残されています。日本の芸術祭が３年ごとに慌ただしく開催されるのに対し、10年という時間は、作品が街の一部になるためには必要な時間であり、それによって街の人たちは新しい作品を迎えることができるのでしょう。しかも「彫刻」という概念は、10年という時間によって少しずつ変化していきます。確かに最初は、いわゆるパブリックアートのような作品だったのかもしれません。しかし、場所や街の人たちとの関係が変化していき、それに伴って彫刻はさまざまな拡がりを持ってきました（写真３）。そして今回、場所と一体となった映像インスタレーション、毎回決まった時間に行われるパフォーマンス（写真４）など、現代的な美術の動きが確実に反映された作品が多く見られました。そして、それらすべてが彫刻と呼ばれています。10年という準備期間を使って街の中に作品が実現し、それらに街の人たちがさまざまに向き合い、受け入れたり、反発していきながら、また次の10年に向かっていきます。もはや彫刻は、その話し合いのための触媒でしかないように思えます。今回の作品から何が残されていくのか、また10年後にぜひ訪れてみたいと思う芸術祭でした。

おまけに最新の美術館について。作品の中に人が含み込まれることに対して、積極的な提案を行おうとしているのがロンドンの**「テート・モダン」**です。そんな美術の変化に対応した展示を行うために、新しい建築が増築されました（写真６）。中でも、アーティストや観客が会話を行うことで何かを生み出す実験の場所**「テート・エクスチェンジ」**は、そんな新しい動きを空間化したものです（写真５）。本館に続いて**ヘルツォーク＆ド・ムーロン**による設計ですが、ある種のロビー的な空間がつくられているだけで、まだ新しい展示空間が提案されているわけではないようでした。しかし、少しずつ、その変化は美術館という建築にもはじまっています。このような同時代における美術の変化を考えたとき、これからの美術館は、これまでとは異なる新しいかたちが必要になってくるでしょう。そんなことを考えさせられる旅でした。

された床があり、そこを裸足で歩くことができる。

分野ごとの切り口で、あらゆる建築物を見ることができるのも建築の楽しさ。
長沼先生が建築構造の視点から見る、コルビュジエとザハの建築。

TRAVEL 4

フランス・マルセイユ、パリ｜イタリア・ローマ

ヨーロッパ建築構造の旅

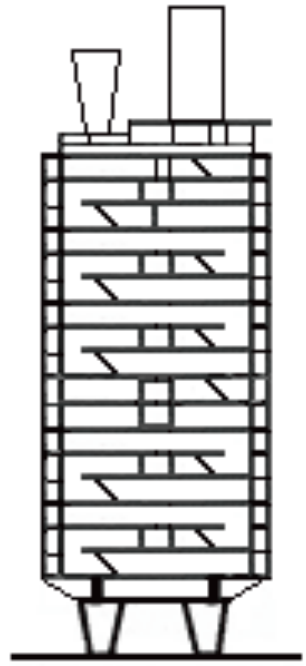
text=長沼一洋 教授

8月21日より15日間、今村雅樹先生と共に建築学科の３年生32名に同行して、スペイン、フランス、イタリアを回る海外研修旅行に出かけました。私は耐震構造、それも特にコンクリート系構造に興味があったので、その視点で見て感じた印象を述べてみたいと思います。

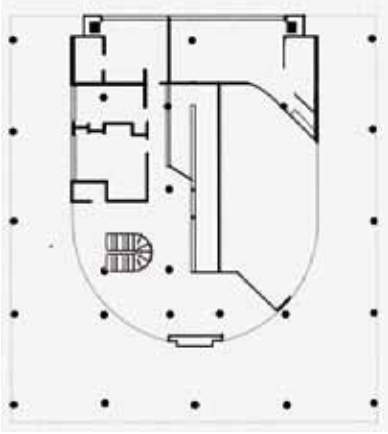
ヨーロッパは世界的に見ると地震が少ない地域で、構造物の耐震性よりも長期挙動や耐久性などに関する研究の方が進んでいます。しかし、ヨーロッパでも南に位置するギリシャ、トルコ、イタリアなどは地震の多い国です。この度訪れたイタリアでは、2016年８月にマグニチュード6.2の地震が起こり、甚大な被害が出ています。

では、今回の研修旅行で見てきた建物の中から、いくつか取り上げてみたいと思います。まず、マルセイユにある**ユニテ・ダビタシオン**です。**ル・コルビュジエ**の設計による有名な鉄筋コンクリート集合住宅で、１階は柱のみのピロティ、その上にメゾネット式のフロアが17層（階数表示は８）あります。短辺方向の断面図より、塔状比（建物の高さ方向と幅方向の長さの比）は2.3程度で、その数値は特に大きくありませんが、ピロティの柱の間隔で割ると、塔状比は5.4程度となります。一般に４以上は塔状建物と言われますので、短辺方向には高い塔と言えます。日本でもピロティ形式の建物は多く建てられていますが、やはり地震でピロティ部分が壊れやすいため、柱はできるだけ外側に配置し、大きめの断面に帯筋を密に入れるなど配慮しています。ユニテ・ダビタシオンの柱は、地震時の水平力に対して最も曲げモーメントが大きくなる下部ほど断面が小さくなっており、しかも柱の内部には設備配管のためのスペースが設けられています。上部がメゾネット形式で比較的階高が低めであることから、高さの割には床スラブの数が多く、上部構造の重さは相当なものと思われます。デザイン的には評価が高い建物ですが、日本の耐震設計法では成立が難しいでしょう。

次は、パリ郊外にある同じくコルビュジエの設計による**サヴォア邸**です。鉄筋コンクリート２階建ての住宅で、１階部分の細い柱が特徴的です。１階の平面図より、外周の柱を結ぶ正方形に近い２階の重さは、１階の壁と柱で十分支えられると思いますが、径が20㎝程度の細い柱では横方向の力にはあまり抵抗できません。地震時の水平力に対して最も効果的に抵抗する壁は、片側（図面の右側）に多く配置されています。つまり、水平剛性が偏心していますので、地



左：ユニテ・ダビタシオン外観
右：ユニテ・ダビタシオンの短辺方向の断面図（作図：長沼一洋）

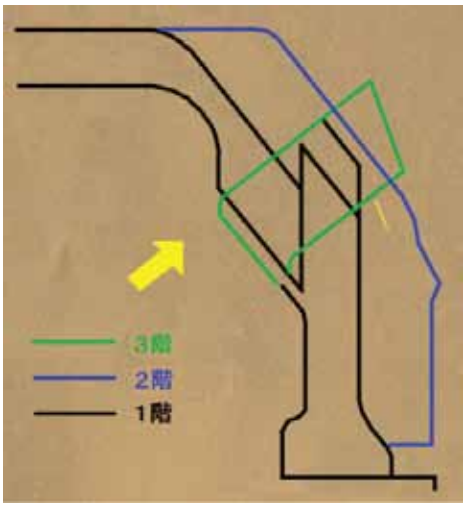


左：サヴォア邸外観
右：サヴォア邸１階平面図
（作図：長沼一洋）

震時には捩れ変形が生じて、壁がない側の揺れが大きくなると思われます。しかし、パリではあまり大きな地震が起きないので、このような構造も可能であり、耐震設計の束縛から解放されることで、デザイン的な自由度は飛躍的に高まります。けれども、この柱の細さは、日本の建物に馴染んでいる構造技術者や設計者からすると、非常に不安感を抱かせるものです。逆に、それがデザイン面での魅力になっているのかもしれませんが、地震国に住む私としては、あまり住みたいとは思えないというのが本音です。とは言え、２階の連続水平窓やテラスを囲むような開放的な空間構成は魅力あるもので、地震さえなければ快適な住まいだと思います。

最後は、比較的新しい建物である**イタリア国立21世紀美術館（MAXXI）**です。**ザハ・ハディド**の設計で、ローマに建設され、2010年にオープンしました。写真は入口近くからのものですが、鉄筋コンクリート造による曲面を多用した構造で、特に３階部分の大きな張り出し部が目をひきます。平面図の黒い線は１階の壁の位置、中央右寄りにある７つの小さな黄色い点は写真に見える細い柱です。２階と３階の壁の位置（一部）をそれぞれ青と緑の線で重ねてみると、１階よりかなり張り出していることがわかります。ローマはヨーロッパの中でも比較的大きな地震が起こる地域ですので、それなりに耐震設計はされていると思いますが、上階の重量が大きいトップヘビーな印象が強く、やはり不安を感じます。７本の細い柱も、水平力に対してはほとんど効果は期待できません。水平力の作用方向に並行な壁が最も有効な耐震要素になりますが、平面図で左下から右上の方向（黄色の矢印の方向）に地震力が作用した場合、１階にはその方向に有効に効く壁が少なく、上の階の転倒モーメントやせん断力に対して大丈夫なのか、やや心配があります。日本で想定している地震力を考えると、この形のままでは国内で建設するのは難しそうです。しかし、最近では鉄筋やコンクリートの強度も高くなっていますので、プレストレスを導入するなど、構造設計上の工夫により、実現は不可能ではないと思います。

以上、３つの鉄筋コンクリート建物について耐震性の観点から考察してみましたが、いずれの建物もそれぞれ個性があり、設計者の明確な意図や創意工夫が感じられるものでした。



左：イタリア国立21世紀美術館の平面図（作図：長沼一洋）
右：イタリア国立21世紀美術館外観

海外研修旅行2017 Aコースレポート

REPORT 1

15日間の旅で得たもの

ロンシャンの礼拝堂での集合写真

TEXT＝石川晃太（学部3年｜今村研究室）

2017年9月4日、我々は13泊15日の日程で3か国7都市を巡る弾丸ヨーロッパ研修の旅を終えた。

成田空港を出発し、まずパリを経由して訪れたのはスペイン・バルセロナ。日本を旅立つ3日前にテロ事件のあった場所だ。そんな情勢の中でも、**サグラダ・ファミリア大聖堂**はたくさんの観光客で賑わっていた。大空間の中に無数に建つ柱とステンドグラスから漏れる光は、樹海を思わせる神秘的な空間だった。バルセロナでは、他に**カサ・ミラ**など**ガウディ**の世界に触れるとともに、**サン・パウ病院**、**バルセロナ・パビリオン**などを見学した。また、ホテルでは最初で最後となった全参加者揃っての食事をした。

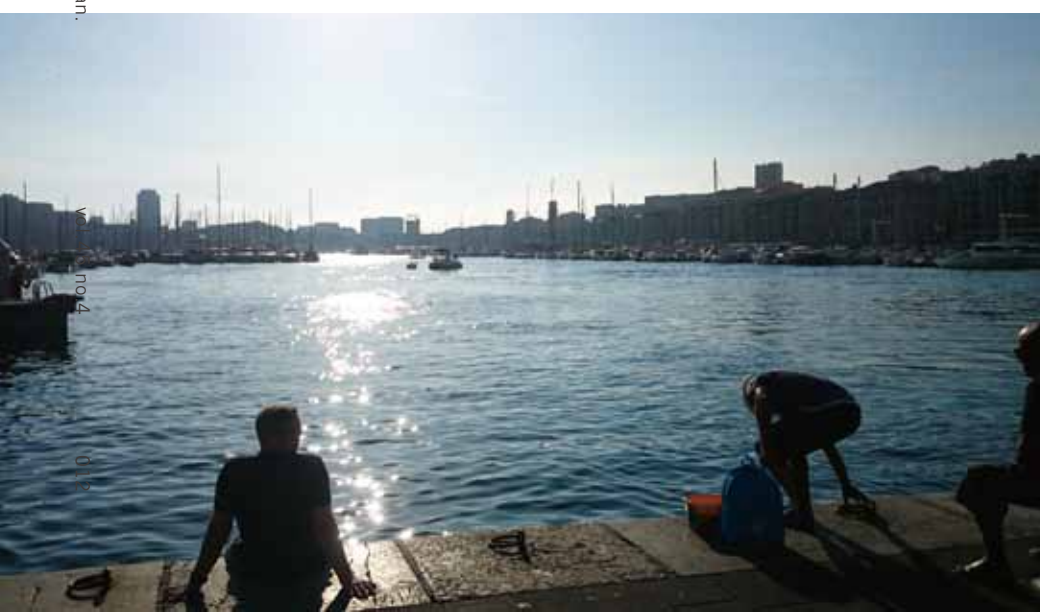
次に、約500㎞の陸路を8時間かけて移動して訪れたのはフランス・マルセイユ。フランス最大の港湾都市であるマルセイユでは、ロマネスク、ビザンチン様式の**ノートルダム・ド・ラ・ガルド大聖堂**や**地中海文明博物館MuCEM**などを見学した。歴史と文化を感じることのできる1日となった。

続いて訪れたのはリヨンとロンシャン。マルセイユも合わせた3都市では、それぞれ**ル・コルビュジエ**の建築を堪能した。間近で見る**ユニテ・ダビタシオン**の巨大さ、**ラ・トゥーレット修道院**の力強さ、**ロンシャンの礼拝堂**の曲線美には驚いたが、それぞれの建築に異なった繊細さを垣間見ることができた。

次の都市は、船に乗って訪れたイタリアの水の都ヴェネツィア。**サンマルコ広場**を中心に、**ドゥカーレ宮殿**や**リアルト橋**を巡った。ここでは海外研修の中日ということもあり、お土産散策をしたり、高級パスタを食べたりと、観光気分を存分に味わった自由研修となった。

次にイタリア・ローマを訪れた。団体研修では、**ヴァチカン美術館**や**サンピエトロ大聖堂**などを訪れ、自由研修では**コロッセオ**、トレビの泉やスペイン階段などの観光地を巡った。暑い中ほとんど歩いてまわったが、石畳の道が多く歩きにくかった。しかし、たくさんのパブリック空間である広場があり、休憩をしながら街を歩くことができた。また、**ザハ・ハディドの国立21世紀美術館（MAXXI）**も見学した。エントランス上部に交差した黒い階段は、下側が光って奇妙さを感じた。設置されている家具なども流線型で、ザハらしさを演出している。

マルセイユの旧港の様子



最後に訪れたのはフランス・パリ。**凱旋門**や**エッフェル塔**はもちろん、**ルーブル美術館**、**オランジュリー美術館**、**オルセー美術館**など芸術にも触れた。日本語ガイドの説明をそっちのけで、先生・学生、皆が建築の構造やディテールを自分の目に焼き付けているのが印象的だった。美術品によって、見せるための空間構成・表現が違っていて面白かった。また、**ポンピドゥー・センター**も見学したのだが、配管・階段が剥き出しで、写真で見るよりも大迫力であった。その無駄が省かれた内部にはとても広い展示空間があり、またさらに驚いた。その他には、**フランク・ゲーリー**の**ルイ・ヴィトン財団美術館**、**ドミニク・ペロー**の**フランス国会図書館**、その他にも**カルチェ財団美術館**や**ラ・ヴィレット公園**などの現代建築を見学した。

2週間という短い期間で、滞在先でも1泊・2泊とせわしない気もしたが、実際のモノを見て触れることによって感性が刺激され、とても濃密な研修旅行となった。「ここのタイルは目地が揃っている」「この柱はこのガラスを支えている」写真ではわからなかったディテール、「日が射して暖かい」「風が吹いて涼しい」そこでしか感じられない居心地、さまざまな感情を得た。今村先生と長沼先生、それぞれ意匠と構造双方からの視点での解説によって、知識を得た。集団行動で深まった仲、友を得た。土産話もできて、15日間すべて良い思い出。今回、海外研修旅行に参加することができ、本当に嬉しく思う。 駿

REPORT 2

実際の建築を体験して設計者と対話する旅

フィルハーモニー・ド・パリ外観

TEXT＝遠藤 翔（学部3年｜今村研究室）

私は、今回の海外研修を含めて、海外には3か国訪れたことがあり、どの国にも約2週間滞在しました。しかし、今回のヨーロッパでの2週間は特に刺激的なもので、建築に対する興味が増えた旅行でした。スペイン、フランス、ヴァチカン、イタリア、それぞれの国に魅力的な街並み、歴史、文化があり、建築を見ながら時代背景に触れていくうちにその街のコンテクストが読み解けていき、メディアだけでは味わえない貴重な経験ができました。建築を実際に見て空間を体験することは、その建築の設計者と対話すること、その言葉を理解することであり、理解できなくても読み取ろうとすることが大事だと思いました。実際、理解できない建築もたくさんあり、勉強不足が否めませんでした。しかし、建築や歴史についてもっと勉強すれば、見方や見え方も変わってくると思うと、数年後にもう一度訪れることが楽しみにもなりました。

ヨーロッパの建築は、スクラップ＆ビルドが繰り返される日本の建築とは違い、リノベーション、コンバージョンにより歴史的建造物を残し、昔の街並みを残しながら新しい建築が建設されています。一つひとつの建築に歴史的背景があり、有名な建築家が設計した建築だけでなく、何でもない住宅や街並みからも学ぶものがたくさんありました。

特に、広場やテラスなどの外部空間の使い方がとても魅力的で、バルセロナの**カサ・ミラ（ガウディ）**の屋上から見た周囲の住宅は、テラスやベランダが緑で綺麗に飾られ、ソファーやベンチが置いてある家もありました。また、最終日に訪れた**ラ・ヴィレット公園**では、休日ということもあり、たくさんの人が公園を自由に使い、寝ている人からスターウォーズのコスプレをしている人までいました。このような積極的な公園の使われ方は、常に建築と公園を同時に考えてきたヨーロッパならではのものだと思いました。ひとりの建築を学ぶ学生として、この国に建築と公園を設計できれば楽しそうだと思いました。

また、今回の研修旅行では出発前からテロが心配されていましたが、私たちのコースは何事もなく無事に終えることができました。強いてハプニングを挙げるなら、私の友達がスマホを失くしたことです（笑）。「スられたかも!!」と言って、ホテルに戻りスマホ停止の手続きを試みたのですが、親の携帯番号を覚えておらず、手続きにかなり時間がかかりました。これから海外研修に行かれる方は緊急連絡先を覚えておきましょう。後日、スマホを拾ってくれた方から連絡が来ていたことがわかり、スリではなくただの紛失だということが判明しました。

最後に、2週間同行してくださった今村先生、長沼先生、ガイドの皆さん、本当にありがとうございました。この研修旅行での経験を活かし、日々精進していきたいと思います。 駿

ラ・ヴィレット公園

Aコース
●日程：2017年8月21日（月）～9月4日（月）
●旅行行程【日本】成田→【スペイン】バルセロナ→【フランス】マルセイユ→エヴー→ロンシャン→【イタリア】ヴェネツィア→ローマ→【フランス】パリ→ポワシー→パリ→【日本】羽田
●参加者：【3年】荒井聖己，池上誠，石川晃太，井谷桃子，宇敷勇人，遠藤翔，太田駿，尾崎未知，折原知弥，川口雄暉，木村武史，酒井和章，佐藤秀哉，菅原倫子，高橋勇太，高林雄太，土屋茉希，中澤佳南子，中野萌子，中村匠，永田真莉那，成田拓登，菱田祐太郎，藤吉真己，本間俊希，松田健，村垣勇樹，元山凌輝，山本渚，綿貫翔太，大村慎子，中澤巧也
●同行教員：今村雅樹 教授，長沼一洋 教授

海外研修旅行2017 Bコースレポート

REPORT 3

ル・コルビュジエ建築に宿泊したかけがえのない経験

ラ・トゥーレット修道院で宿泊した部屋。

TEXT=遠竹麻月（学部3年｜古澤・二瓶研究室）

日本に帰ってきて2か月が経った。左車線に違和感を感じることも、友達が「グラッツェ」を多用することも、ステンドグラスを見てロマネスクだのゴシックだの言うこともなくなった。しかし、ヨーロッパでの1か月弱の経験は、私たちに間違いなく大きな影響を与えてくれたと思うし、事実、私はいつでも鮮明にヨーロッパでの出来事を思い出すことができる。少しずつ少しずつ、きっかけがあれば忘れないようにその記憶たちを思い返し、咀嚼し続けてきた2か月間。その度に、記憶は自分という存在の一部に帰属し、今でも新たな発見と感動を私に与え続けてくれるのだ。

人は経験によってつくられる。たくさんの出会いと活動、いや、決してそれだけではない。無意識に聞いていた周囲の活気づいた喧騒や、小さなレストランの前を通ったときにした料理の匂い、友人越しに見たコンクリートの壁の質感までもが、さまざまなかたちで私を構成し、発想や思考、ときには感情にまでも介入してくる。

ユニテ・ダビタシオン外観。

ヨーロッパで印象に残った建築物、出会い、経験についてこのように文章にして語ることは簡単だ。しかし、文字という媒体ですべてが伝わるものだとは思っていない。当たり前だ。いまから綴っていく一つひとつの出来事には、その事実にさらに音や温度、何よりもそのときの感情などといったあらゆる要素が付加され、記憶として残っているわけだが、それをすべて伝えることはできない。だからこそ私は切実に、機会があるなら同じようにヨーロッパの地を訪れてほしいと思う。自分だけの経験を得て、貴重な財産として日本に持ち帰ってくる仲間が増えることを願うばかりだ。

ヨーロッパ滞在13日目、私たちは**ル・コルビュジエ**の設計した**ユニテ・ダビタシオン**に泊まった。ル・コルビュジエはご存知のとおり、**「ヴォアザン計画」**や**「輝く都市」**など、かねてから都市計画について言及していた建築家である。そして、彼が集合住宅として都市計画案を実現したのがこのユニテ・ダビタシオンであった。重たく持ち上げられたコンクリート打ち放しの仕上げと、赤、黄色、緑、青などの鮮やかな色使い、そして1階部分のピロティには、荒々しいコンクリートを持ち上げる力強さを感じ、私はその姿を順に自分の目に焼き付けるように見ていった。

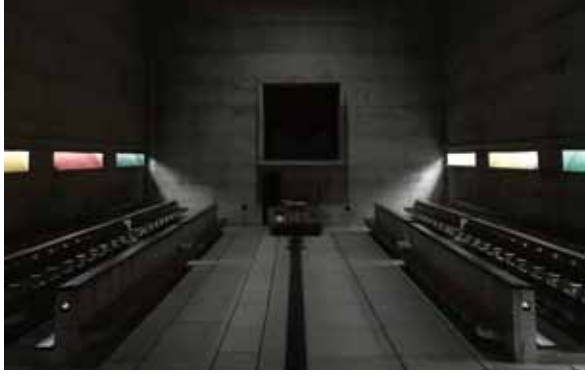
その間も、私がこの建築作品の圧倒的な存在感から解放されることはなかった。ユニテ・ダビタシオンの内部に足を踏み入れてからも、私は度々訪れる感動と興味にせわしなく心を奪われながら、そこにある独特の空気感と静けさの中で思考を繰り返した。荒々しい外見とは対照的に、温かみを感じる木材建具、鮮やかな色をしたポストや扉、そしてモデュロールを駆使した繊細な室内の配置やサイズ感。そのすべてに目を配り、触れていった。集合住宅の規模とは言え、都市の中心となるような大きな建築物ではない。しかし彼は、都市を構成する中で一番小さなユニットであるかもしれない住宅を、都市の要素を加えながらではあるが、ここまでつくり上げた。何を考えながら、彼はこの建築物をかたちにしていったのか。

コルビュジエの建築作品に触れたのはこれだけではない。リヨン郊外にある**ラ・トゥーレット修道院**にも泊まる機会があった。質素な印象を感じるコンクリート打ち放しのファサードを目にしてから、そのあとに見る礼拝空間の壁や天井に塗装された色彩と、それを照らす自然光はとても魅力的に感じた。ここにも不思議な空気感と静けさがあった。宿泊した部屋はとても簡素で、ベッドと机、小さな洗面台と備え付けられた建具だけ。明かりも日本のように全体を照らすものではなく、机の上や洗面台、そして枕元を照らすような小さな明かりのみだった。夜はあいにくの雨。しかしその雨音を聞きながら、薄暗い部屋で思考する時間は、少なからず私にかけがえのないものを与えてくれた。

建築を見ることで得られるものは知識だけではない。そこで過ごす時間は、当時の考えや思想だけでなく、自分と向き合う時間にもなる。同じ場所を訪れても、同じものを見ても、同じ音を聞いても、感じることはみんな違うのだから、話を聞くのと実際に体験するのとでは得られるものの量も質も違うはずだ。もっとたくさんのものに触れて、たくさんの経験をしていきたい。そう考えていた自分にとって、この海外研修での経験はとても貴重なものだったと思う。帰国して2か月たった今でも、ヨーロッパでのすべての出会いと経験に感謝せずにはいられない。 駿

REPORT 4

「建築を見ること」を考える



ラ・トゥーレット修道院の礼拝堂内部。色の付いた壁を反射して光が差し込んでくる。

TEXT＝倉田慧一（学部３年｜古澤・二瓶研究室）

この研修旅行で最も印象に残っているのは、やはり**ラ・トゥーレット修道院**に宿泊したことである。修道士がかつて使っていた部屋に泊まることができた。ラ・トゥーレットと言えば、誰もが思い浮かべる独房のようなあの部屋である。モデュロールが！色が！と友達と話していたことを思い出す。夕食は修道士とお祈りをしてから食べ、翌朝はミサ（参加者は私ひとりと外国人カップル１組のみ！）に参加し、修道院での生活を垣間見ることができた。部屋の中から眺めた雨降る景色、換気用の細長い鉄の扉を開けて顔を近付けたときの冷たい風、夜中ひとりで恐る恐る歩いた真っ暗な廊下の壁の触り心地、さまざまな印象が強く残っているのはやはり一晩建築の中に身を置いて過ごしたからではないだろうか。建築を小一時間見学するのとは経験の厚みが圧倒的に違う。当然だが、宿泊施設としては最悪である。部屋は狭くて暗いし、トイレ、シャワーは共同だ。しかし、その不便さを含め、ラ・トゥーレットでのさまざまな出来事が印象を立体的にしてくれている。一晩過ごせば建築を見ようとしない時間が必ずあるが、それでも建築は常に自分の周りにある。積極的に見ようとしないときこそ、作品集や雑誌では得られない発見があるのかもしれない。

シュタデルホーフェン駅。右奥は駅舎だが、駅舎を通らずそのまま広場にアクセスできる。

カルロ・スカルパも印象に残っている。写真で見ていたスカルパも好きだが、今回の旅ですっかりスカルパの大ファンになってしまった。（作品集を見て期待を膨らませて見に行くと、ガッカリなんてこともあるけれど。）実際に足を運ばないと良さを理解できない作品ばかりだった。自由時間を含めると、**オリベッティショールーム**、**ヴェネツィア建築大学の正門と中庭**、**スタンパーリア財団**、ヴェネツィア・ビエンナーレの**ベネズエラ館**と**チケットブース**、**ヴェローナ銀行**、**カステルヴェッキオ美術館**の６か所を見学することができた。作品に共通する空気感がわかるのと同時に、作品毎の特徴も発見できるようになってくる。代表作をひとつだけ見学して満足してしまいがちだが、ある程度の数を見てまわると、より深く理解できるようになることを再確認できた。

旅の間、幾度となく駅と本屋に足を運んだ。中でもダントツで衝撃を受けたのは、チューリッヒの**中央駅**と**シュタデルホーフェン駅**（**カラトラバ**設計）である。これらの駅は、ヨーロッパの駅らしく改札がなく、誰でも自由に出入りできるのだが、それだけでなく、トラムではない普通の電車の駅なのに歩道がそのままプラットフォームとして使われていたり、広場のヘリがプラットフォームとして使われていたりと、日本では考えられないほどシームレスに歩行空間とつながっている。ネットの写真を見て、カラトラバっぽいなとしか思わなかったシュタデルホーフェン駅は、このような成熟した都市空間の中にあった。

研修旅行では単に建築を見学するだけでなく、実際に足を運んで建築を見る意味や見方について考えることができた。これは一人旅では得られなかったことだと思う。先生方をはじめ、３週間ともに過ごした皆さん、ありがとうございました。 駿

Bコース
●日程：2017年８月16日（水）～９月８日（金）
●旅行行程【日本】成田→【スペイン】バルセロナ→【イタリア】ローマ→フィレンツェ→ヴェネツィア→ヴェローナ→ミラノ→【フランス】ル・トロネ→マルセイユ→ニーム→リヨン→エヴー→コルソー→【スイス】エキュブラン→チューリッヒ→リーエン→【ドイツ】ヴァイル・アム・ライン→【スイス】バーゼル→【フランス】ロンシャン→ランス→パリ→ポワシー→パリ→【日本】羽田
●参加者：【２年】青木怜依奈，安部健登，荒木鴻歩，倉成湧貴，澁澤明歩，藤城滉俊，山口大毅【３年】青井康治，秋谷誠，宇佐見賢人，宇佐見拓朗，海上裕貴，川畑純，川向都夢，倉田慧一，小島幹生，砂古口真帆，笹本直希，佐村航，田中優美，田邉勇輝，遠竹麻月，中崎佑香，丹羽みなみ，廣田龍平，伏見塁司，許絢華，丸川貴大，宮﨑未帆，茂呂和也，矢田部瑛平，山川香子，山柿建人，吉澤真，渡辺大樹，川永翼【Ｍ２】坂口紘一
●同行教員：重枝豊 教授，宮田敦典 助手

トラブルで訪問先を変えたところでの出会いから、
貴重な建築現場を見学できた星先生が目にしたものとは？

TRAVEL 5

ドイツ・ハンブルグ｜ポーランド・シュチェチン

音響をめぐる旅

text=星 和磨 短大准教授

左：エルプフィルハーモニー外観。右：建設現場。壁面の波型は音の拡散をねらっており、音響障害が起きないように、壁によって波型の深さが異なる。

私が大学３年生のときに参加した建築学科の海外研修旅行は、カイロ、アテネ、イスタンブール、イタリア各地、バルセロナ、パリとヨーロッパの歴史と建築の変遷を体感できる、とても素晴らしい３週間のコースであった。しかし同時に、なぜ高校で世界史を履修しなかったのかととても後悔した。そして、大学に教員として戻ってきてからは、気の向くままにヨーロッパの歴史や建築史関連の本をちょこちょこ読むようになった。

2015年11月、ヨーロッパ各地のコンサートホールを視察する機会を得た。パリで起きたテロのため、フィルハーモニー・ド・パリ（ジャン・ヌーヴェル）の訪問は叶わなかったが、急遽訪ねた**ウイーン楽友協会**のホワイエで、永田音響設計の小口恵司氏に偶然お会いした。なんでもハンブルグの**エルプフィルハーモニー（ヘルツォーク＆ド・ムーロン）**の現場監理に来ており、週末を使って演奏を楽しみにきたとのことである。

そこで数日後、図々しくもハンブルグを訪ねて建設現場を見学させていただいた。このコンサートホールは、計画の段階から3D-CGが多用されているだけでなく、サグラダ・ファミリアのように、実際の壁面や天井材を3Dデータから機械で整形、運搬できる大きさにスライス、現場に運び組み上げられているとのことである。また、ホワイエや通路で使用されている吸音材は、グラスウールを主体とした材の上に通気性があるしっくいを塗ることで、任意の形状でも目地が出ないように仕上げられる。この吸音仕上げは欧米で広く使われているが、日本では導入事例がほとんどない。

また、ポーランドのシュチェチンというバルト海に面する小さな港町にできた**シュチェチン・フィルハーモニー**を訪ねた。白いホワイエから黄金の演奏空間への視覚的インパクトが大きく印象的だが、見た目とは裏腹な繊細な響きもとても印象的であった。

大きな歴史の流れを理解して、虫食い的にだが建築の知識を頭に入れて街をさまよう。そして、心地良い空間や街並みを体感することで、それらを自分なりに咀嚼することがだんだん楽しくなってきた。３年生のときにもっと知識があれば、あの３週間は、と今も憂う。

エルプフィルハーモニーのホワイエや通路などは、喧噪感を抑えるために積極的に吸音処理している。このあとに通気性のあるしっくいを塗って仕上げる。

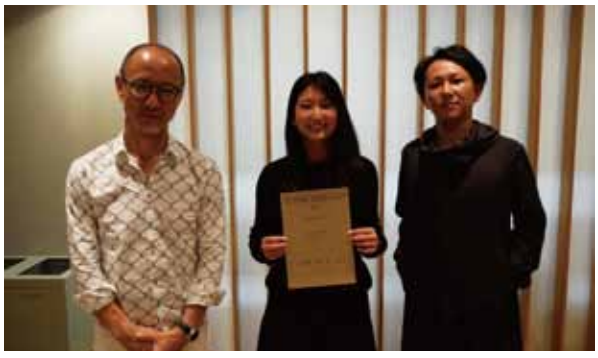
上：シュチェチン・フィルハーモニーのホワイエ。白い空間が来場者を際立たせている。左下：黄金の演奏空間。黒いシートが空間を引き締めている。右下：夜の外観。

学部２年から４年の全15作品を ゲスト建築家がクリティック

Super Jury（総合講評会）とは、学部２年生から４年生までの優秀作品15点のプレゼンテーション及び講評を、ゲストクリティックを招いて行う年に１度のイベント。今年のゲストクリティックは、坂牛卓（建築家 / 東京理科大学教授 / O.F.D.A共同主催）さん、長岡勉（建築家 / POINT主催）さん、増田信吾（建築家 / 増田信吾＋大坪克亘共同主催）さん。学年や課題の垣根を超え、2017年度建築学科優秀作品が決定する。講評会後には、授賞式を兼ねた懇親会が行われ、最優秀賞１点と優秀賞が２点、ゲストクリティック３名の名前がつけられた賞が各１点、合計６つの賞が選出された。

作品一覧

●建築設計Ⅱ課題「サードプレイス」：「Public Slope」中田智聡、「ゆらぐ境界、重なる視線」後山瑛美、「都市の中の空地」瀧川未純、「"One's feet ～垂れ壁による不均質な空間～"」福田一也（増田賞）●建築設計Ⅱ課題「住宅」：「居場所をみつける。」鳥山亜紗子、「谷中の住宅」額賀愛美、「風月」一柳亮太郎（長岡賞）、「うずまきハウス」成澤茉由、●建築設計Ⅳ「南青山コンプレックス」：「時代を行き交う２つの意識」砂古口真帆（最優秀賞）、「街を巻く」山川香子（坂牛賞）、「いきる建築、みえる居住空間」石川晃太（優秀賞）、「抜ける光の道」小熊透太●建築設計Ⅵ：「連鎖する都市」今村ユニット・東紀史、「"KANDA PLACE - 都市における繋がりと賑わいを生む立体トラックの提案 - "」関谷ユニット・高橋樹、「祝祭の宿り木」飛田ユニット・田口周弥（優秀賞）

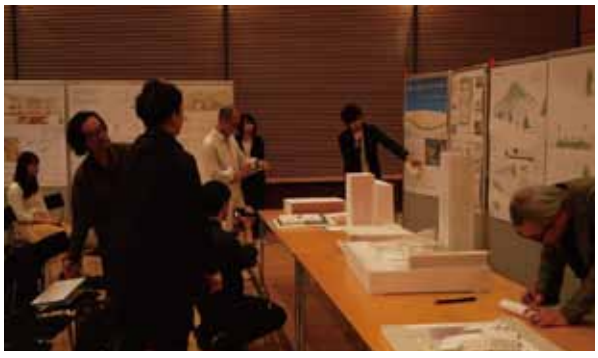


審査員の坂牛さん（左）、増田さん（右）と最優秀賞の砂古口さん。「課題に対し、自分なりの回答をする姿勢や、全体のコンポジションが良かった」と坂牛さんからのコメント。

優秀賞の石川くんの発表の様子。手数をかけずに商業と人の交わりをつくるデザインが評価された。

優秀賞の田口くん。「プランニングの静かさと、屋根の主張のバランス感覚が良い。もう一歩先へ進んでほしい」と増田さんからのコメント。

坂牛賞は山川さん。都市的アーバニティーをつくる可能性を感じさせるスロープを用いた設計と、そのリアリティが評価された。



増田賞は福田くん。垂れ壁を用いてひとりになる空間をつくるアイデアが評価された一方で、受賞を機に、自身のアイデアの面白さに意識的になることが期待された。

長岡賞の一柳くん発表の様子。「リアリティと快楽性を主にしたわかりやすさがすばらしい。過去の建築に対する見識と理解を深め、多くの人に共感される設計をしてほしい」と長岡さんからのコメント。

コンクリート、モルタル素材に立ち向かった17日間

text = 渡辺富雄 特任教授

夏期集中ワークショップは、普段の建築設計の授業では経験できないテーマを取り上げ、限られた時間の中でデザインを集中的にまとめることを目的にしています。テーマは、小建築やインテリア家具の設計・製作などで、今回の共通テーマは、「コンクリート系素材と造形」でした。

ユニット（以下Uと記述）マスターは、非常勤講師の浅子佳英、大井裕介、馬場兼伸の３先生と私の４人。さらに、アドバイザーを建築家・岡啓輔さんにお願いしました。岡さんは、東京三田で将来自宅となるコンクリート造の「蟻鱒鳶ル（アリマストンビル）」をセルフビルドしており、コンクリートに大変詳しい方です。

参加者は、浅子U（９名）、大井U（７名）、馬場U（８名）、渡辺U（８名）で、３年生31名、４年生１名の合計32名でした。

浅子Uは、「コンクリートの柱の造形」をテーマにひとり１作品。大井Uと渡辺Uは、「コンクリート系素材と日常生活の中の造形」で、大井Uは全員で４作品、渡辺Uは２〜３人の３グループで３作品、馬場Uは、「５号館転写計画」でひとり１作品を製作しました。

コンクリート、モルタルを型枠に打設、養生、脱型するというプロセスが必要なため、例年よりも少し早めにスタートし、全体で17日間行いました。

●全体のスケジュール

6/28（水）　デザインワークショップガイダンス
7/27（木）　キックオフミーティング　ユニット分け
7/31（月）〜8/4（土）ユニット•グループ内でのエスキス
8/5（土）　　コンクリート打設の検証 、５号館１階ピロティ
8/6（日）〜8/12（土）エスキス、打設、養生、脱型
8/13（日）　最終発表会、打ち上げパーティ

都心キャンパスでスペース（工房）がないため、作業は５号館５階の製図室にブルーシートを敷いて行いました。工具や材料もすべてホームセンターで買い出すことからはじめるという条件の中で、何とか終えることができました。ユニットマスターの先生方からは、自分自身も貴重な体験ができたと好評でした。参加した皆さんは、はじめてのことなので、大変だったと思いますが、「コンクリート・モルタル素材に触れる」という、ワークショップのひとつの事例として貴重な体験ができたと思います。

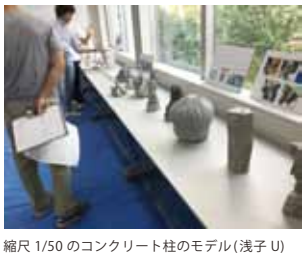
それぞれの作品（成果物）は、スタジオワークス2017で紹介される予定なので、楽しみにしていてください。 駿

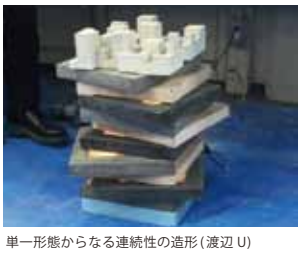
岡啓輔さんとともに型枠への打設（8/5）

コンクリートの打設（8/5）

浅子 U 制作風景

大井 U 制作風景


縮尺 1/50 のコンクリート柱のモデル(浅子 U)


単一形態からなる連続性の造形(渡辺 U)

建築週間期間中１号館 CST ギャラリーに作品が展示された（手前より渡辺、馬場、大井、浅子 U の作品）

プランターボックス (大井U)

５号館の階段を写した造形（馬場U）の発表会

竹を使って「中央庭園を豊かにする空間やもの」をつくる

text = 廣石秀造 短大助教

平成19年からスタートした短大建築・生活デザイン学科のサマーセッション科目「ものづくりワークショップ」は、今年で11年目を迎えました。平成26年度からは松戸市秋山での竹林整備体験（竹伐り）と船橋校舎での製作というスタイルとなり、今年も同様の流れで７月28日（事前レクチャー）と８月７日～９日の計４日間を使って，28名の受講生（５グループ）によるワークショップを行いました。ワークショップ数日前には台風接近の予報が出ており、実施内容の変更なども検討していましたが、幸いにも当日は台風の進路が逸れ、暑すぎない心地良い気候の中で実施することができました。

ワークショップ１日目は、朝から北総線秋山駅に集合し、作業に対する心構えなどの諸注意を実施したあとに、竹林での伐採作業を行いました。現地で竹林を管理されている「松戸里やま応援団」の方々にご協力いただき、竹林の整備や竹の扱い方などを教わりながら、80本近くの竹を伐採しました。各班で予め検討してきた製作物に必要な竹の長さ、太さ、本数を選別し、他の班との取り違え防止のため印まで付ける“こだわり”も見られ、伐採した竹をトラックに積んで初日の作業を終えました。

２、３日目は、船橋校舎14号館ピロティでの製作です。道具の使い方や竹組の方法などのレクチャーを行ったあとに、各班による製作作業を実施しました。最初は、はじめて扱う工具類に戸惑う様子が見られましたが、各班で協力しながら竹組みやデザインに関する試行錯誤も繰り返し、最終的に数人が利用する大きな家具や遊具など、５つの作品が完成しました。また、学生の作業に刺激されて、複数の教員が看板をつくりはじめるなど、例年にない風景も見られ、学生のみならず教員も楽しんで取り組んでいたようです。最後に、各班による完成作品のプレゼン・講評を実施し、終了しました。

最後に、竹林整備体験でご指導いただいたNPO法人「松戸里やま応援団」の皆さまに感謝申し上げます。

松戸里やま応援団の皆さんと作業後に集合写真

竹を伐採中

部材を切断中

A班：BAMBOO CHAIR

B班：聴竹座椅子

C班：竹のブランコ

D班：竹ベンチ

E班：目をあけたらそこにいた

教員による看板づくり

NEWS & TOPICS

第39回コンクリート工学講演会において建築学専攻２年の河野圭一郎君と博士課程修了の荒巻卓晃君が年次論文奨励賞を受賞

「第39回コンクリート工学講演会」（主催：公益社団法人日本コンクリート工学会）において、建築学専攻２年の河野圭一郎君（長沼・田嶋研）の論文「三次元非線形FEM解析に基づく偏心RC造骨組のねじれ抵抗機構の考察」と、建築学専攻博士課程修了の荒巻卓晃君（中田・宮田研）の論文「在来型枠工法におけるセパレータの割付および内端太の構成が異なる壁型枠の変形に関する一考察」が「年次論文奨励賞」を受賞した。本賞は39歳未満の若手研究者に与えられるもので、今回は67名が受賞している。

IAUD住宅学生コンペにおいて建築学科４年の高須信博君が入賞を受賞

「IAUD住宅学生コンペ」（主催：一般財団法人国際ユニヴァーサルデザイン協議会）において、建築学科４年の高須信博君（山﨑研）の作品「街の小さな拠り所」が「入賞」を受賞した。テーマは「ゼロからつくる日本の住まい」で、ユニバーサルデザイン（UD）の基本に留まらない、快適で達成感がある暮らしを実現することを目標とした「UDプラス」への提案が求められた。今回はグランプリは該当なし、それに次ぐ入賞２点に選ばれた。

第７回JPM「夢の賃貸住宅」学生コンテストにおいて建築学専攻１年の増田俊君と横山大貴君が特別協賛会員賞を受賞

「第７回JPM『夢の賃貸住宅』学生コンテスト」（主催：公益財団法人日本賃貸住宅管理協会）において、建築学専攻１年の増田俊君（今村研）と横山大貴君（同）の作品「賃貸図書住宅　としょみちのある暮らし」が「特別協賛会員賞（東急住宅リース賞）」を受賞した。テーマは「コミュニティと賃貸住宅」で、応募総数79点から、公開プレゼンテーションを経てグランプリ１点、東京都支部長賞１点に次ぐ特別協賛会員賞９点に選ばれた。

第13回ダイワハウスコンペティションにおいて建築学専攻１年の小野良希君が佳作を受賞

「第13回ダイワハウスコンペティション」（主催：大和ハウス工業）において、建築学科専攻１年の小野良希君（古澤研）の作品「-Epicenter as a real space in the suburbs-」が佳作を受賞した。テーマは「過渡期の家」で、応募総数185点から、最優秀賞１点、優秀賞２点、入選４点に次ぐ佳作10点に選ばれた。

2017木の家設計グランプリにおいて建築学専攻１年の横山大貴君、藤井将大君、佐藤千香さんが審査員賞を受賞

「2017木の家設計グランプリ」（主催：木の家専門店　谷口工務店）において、建築学専攻１年の横山大貴君（今村研）、藤井将大君（佐藤光彦研）、佐藤千香さん（山﨑研）の作品「小さな小屋が集まる大きな家」が「審査員賞（松岡拓公雄賞）」を受賞した。テーマは「『働く家』を考える」で、応募総数127点から、１次審査により10点が選ばれ、公開プレゼンテーションを経て第１位１点、第２位１点、第３位１点に次ぐ審査員賞６点に選ばれた。

学生サマーセミナー2017「集積あるいは変化するストラクチュル・アート」において建築学科４年と建築学専攻１年のチームが優秀賞を受賞

「学生サマーセミナー2017『集積あるいは変化するストラクチュル・アート』」（主催：一般社団法人日本建築学会）において、建築学科４年の小川舞さん、進藤隆太君、森下諒君、矢ヶ崎拓人君、建築学専攻１年の鴛海昂君（すべて岡田・宮里研）の作品「Reciprocal　Dome」が優秀賞を受賞した。応募総数61点（うち海外11点）から、最優秀賞１点、優秀賞４点が選ばれた。また、25名の審査員から授与される審査員賞にも、多数の本学学生チームが入賞している。

学生照明展2017において建築学専攻２年の菊池毅君が優秀賞を受賞

「学生照明展2017」（主催：港区立エコプラザ＋学生照明展2017実行委員会）において、建築学専攻２年の菊池毅君（今村研）の作品「SENSAIヒカリ」が「優秀賞」を受賞した。学生の考える「○○のため」のベストなあかりを、エコロジーの観点から製作された「光環境模型」「照明器具」「ライティングアート」で提案するもの。最優秀１点に次ぐ優秀賞２点に選ばれ、あわせて展示会に出展された。

全国合同建築卒業設計展「卒、17」において建築学専攻１年の伊東亮祐君がゲストクリティーク賞を受賞

「全国合同建築卒業設計展　卒、17」（主催：「卒、17」実行委員会）において、建築学専攻１年の伊東亮祐君（佐藤光彦研）の作品「第一海堡の九相図」が「ゲストクリティーク賞・種田元晴賞」を受賞した。また、建築学専攻１年の宝迫嘉乃さん（佐藤光彦研）の作品「シェアの重層」が10選に選出された。関東12大学から55作品をが出展され、２日間にわたりそれぞれ異なるゲストクリティーク４名による講評会が行われた。両日ともに10作品が選出され、その中から最優秀賞１点、ゲストクリティーク賞４点、協賛賞２点が選ばれた。

BOOK

冨田隆太准教授の共著書『基礎教材　建築環境工学』（井上書院）が刊行された。本書は、大学生、専門学校生などの初学者を対象に、建築環境工学の基本分野である音環境、熱環境、空気環境、光環境についてまとめられている。建築環境工学に関する最新情報が盛り込まれるとともに、建築士の出題傾向分析や単元ごとに関連する問題、コラムなどが掲載されている。

卒業から○年、OB/OGから現役学生の皆さんへのメッセージ

ジョブローテーションで３つの部署を経験
将来は技術と経験を備えた技術者に

銭 叶蓓（センヨウベイ）

-所属：大林組建築事業部設備部
-資格：一級建築士

-卒業・修了年：2013年修了（建築学専攻）
-所属研究室：吉野研究室
-修士研究テーマ：中国甘粛省ユグル族自治県における居住環境実態とバイオヴィレッジ構想

学部２、３年生のころ、世の中はCO_2削減や省エネ技術が盛んに取り上げられはじめた時期でした。大学の授業でCASBEEやLEEDといった建築環境性能を評価する仕組みを知り、将来は建物の環境エンジニアリングに携わりたいと思いはじめました。３年生のとき、環境・構造コースに進み、のちに温熱環境をテーマとする研究室を選びました。その後、大学院へ進み、就活ではゼネコンや組織設計事務所の会社説明会に参加し、設備職に絞って情報収集を行いました。

５年で３つの部署を経験できるシステム

私が働いている会社の設備職の大きな特徴に、５年間をかけて３つの部署を経験するジョブローテーションというシステムがあります。最初に配属された現場では、聞き慣れない専門用語が飛び交う会議に撃沈し、施工のことは何もわからない中で、各種書類の作成やチェックの仕事に追われ、慣れないことがたくさんありました。やっと慣れた頃に設計部署に異動となり、今度は建物の水・空調システムを考えたり、計算方法と根拠に悩んだり、法令チェックに苦労したりしました。今は、設備部で、設備工事に必要な各種機器や工事費用の見積りを作成し、工事の協力会社（サブコン）と協議を行い、その金額をもって建物の入札や顧客との工事契約を結びます。振り返ると、今までの４年間はいろいろなことを勉強してきました。

社会で求められるのは自分で主体性を持つこと
大学院はそれを鍛えることができる

大学院で行った研究や学修は、実務に直接はつながりません。ただ仕事をしてすぐに、研究と同様に自分で考えて行動することが大切だということに気付きました。どの仕事も必ず目標と締切があり、成果を求められます。大学院の研究にも通じます。研究テーマと修論提出の時期は予め決まっていて、中身をどう肉付けていくかは自分次第。そのために、自分で調べ、スケジュールを管理し、論理的に思考することの訓練を受けてきたことが、社会に出てからも一番役に立っていると思います。はじめから、一から十までを教えてもらうことを待つのではなく、自分が主体性を持って仕事に取り込むことで、仕事のやり甲斐を見い出せると思います。

社内の日大OB/OGとの交流から得られるもの

会社では、日大出身のOB、OG間で定期的に懇親会が行われています。人数と規模は社内でもトップクラスです。そこで出会った大学の先輩たちはいろいろな世代に渡り、それぞれ違うキャリアを辿ってきた人ばかり。大先輩から豊富な経験談を聞いたり、年代の近い先輩にはいろいろなことを相談できたり、同じ大学出身というだけで親近感が湧いてきます。

技術力と経験値を備えた技術者に

ジョブローテーションはようやく最後の部署になり、それを終えると次の仕事場からは、今まで蓄積した知識を発揮する場になると思います。これからは、まずプロジェクトの主担当として自分の技術をさらに磨き、得意分野を極めていきたいと考えています。将来の夢は、環境に配慮した省エネ建築が世の中により一層増えるように、技術力と経験値を両方備えた技術者になることです。 駿

就職活動へ向けてアドバイス！

最近のインターンシップは、どの企業も充実しています。気になる企業のものは参加して、社風や仕事内容を自分の目で確かめましょう。担当者には興味を持ったことを積極的に質問して自己アピールを。大人のマナーも忘れずに！　挨拶や立ち振る舞いはもちろん、電子メールの返事や電話対応を覚えようとする姿勢を見せるのも、好印象につながると思います。

ARCHITECTURE & ME

[連載]私と建築 vol.90

お陰様で創立30周年

text=金田勝徳 元特任教授

私が構造設計事務所を設立して以来、間もなく30年が経過しようとしている。設立時に事務所の方針のひとつとして掲げた「戸建住宅から超高層建築まで」のとおり、その間に手掛けた仕事の数は、大小取り混ぜて1,300件になろうとしている。

これらの一つひとつを鮮明に覚えている自信はないが、いずれもその都度、全力を尽くしたことには変わりはない。その中から、私の構造設計人生50年の間に転機となったふたつの仕事を紹介したい。

酒田市飯森山国体記念体育館

建築設計は谷口建築研究所を主催する谷口吉生氏と、同研究所のパートナーで、後に本学理工学部教授に就任された高宮眞介氏によっている。この体育館の敷地は、酒田市内の小規模ながら自然景観豊かな公園内にあることから、谷口・高宮両氏からその景観を損なうことなく、高さの低い体育館にしたいとの構想が提示された。それを受けて、大学時代の恩師である斎藤公男先生から、ライズの低いアーチ形状の張弦梁構造が提案された。

その後、斎藤先生からの推薦で、この仕事の構造設計を担当させていただくことになり、このことが私の事務所設立のきっかけになった。当時の建築家と斎藤先生はじめ関係者の熱意が、設計から竣工まで途切れることなく続くさまは、それまでとは違った世界を観ているのでは、とさえ思える光景であった。これ以降、張弦梁が社会に広く認識されることになり、私の事務所のあり方にも大きな影響を与えることになった。

上：酒田市体育館大体育館内部から見る張弦梁構造
下：酒田市飯森山公園全景

かねだ・かつのり：1944年、東京都出身。都立国立高等学校卒業。1968年、日本大学理工学部建築学科卒。1988年（株）構造計画プラス・ワン代表。2006年～11年、芝浦工業大学特任教授。2011～14年、日本大学理工学部建築学科特任教授。

上：埼玉県立大学のプレキャストコンクリート柱が並ぶメディアギャラリー
下：並列配置された4年制大学棟と短大棟

埼玉県立大学

埼玉県内に点在していた看護福祉系の短期大学を統合し、それを機に4年制大学も併設して新たな県立大学を設立するプロジェクトであった。設計は私と大学時代に同級であった山本理顕氏が担当している。私の印象にある大学時代の山本氏は、際立って目立つ存在ではなかったが、意匠設計を目指す学生達のオピニオンリーダー的な存在であった。

その彼が、プロポーザルで自ら提案した長さ200mを超える細長い4年制大学棟と短大棟が並列する施設をどのようにしつらえるかに悩み、私達との協議を重ねていった。その末に考え出されたのが、細い柱を短スパンに規則正しく並べた列柱空間であった。構造的には単純明快ではあるが、多数のRC小断面部材を素地のまま、きれいなディテールで納めることが設計上のポイントであった。解決策は、プレキャスト・プレストレストコンクリート（PCa・PC）工法以外になかった。

山本氏にとってPCa・PC工法ははじめての経験であり、私にとっても同様であった。しかしこの工法を使いこなすための山本氏とスタッフ達の旺盛なチャレンジ精神が、それまでに類例を見ないPCa・PC建築の実現につながった。この間の常に決断を迫られるトップランナー特有の孤独感に耐えながら、建築家としての重責を全うする山本氏の逞さに、多くのことを学び取ることができた。

想えば卒業以来半世紀もの間、構造設計を続けられているのは、こうした大学や社会から得られた貴重な人との絆と体験に大きく依存していることに間違いはない。「お陰様で」とはまさにこのことなのだろう。

Contents

02 [SPECIAL FEATURE]

世界を旅して考える

TRAVEL 1｜ブラジル もうひとつのモダニズム text=佐藤光彦 教授
TRAVEL 2｜いろいろな海外報告 text=宮里直也 教授
TRAVEL 3｜これからの美術館を探す旅 text=佐藤慎也 教授
TRAVEL 4｜ヨーロッパ建築構造の旅 text=長沼一洋 教授

海外研修旅行2017レポート
REPORT 1｜15日間の旅で得たもの　text=石川晃太（学部3年｜今村研究室）
REPORT 2｜実際の建築を体験して 設計者と対話する旅　text=遠藤 翔（学部3年｜今村研究室）
REPORT 3｜ル・コルビュジエ建築に宿泊した かけがえのない経験 text=遠竹麻月（学部3年｜古澤・二瓶研究室）
REPORT 4｜「建築を見ること」を考える text=倉田慧一（学部3年｜古澤・二瓶研究室）

TRAVEL 5｜音響をめぐる旅 text=星 和磨 短大准教授

17 [REPORT]

建築学科スーパージュリー 2017
建築学科デザインワークショップ
短大建築・生活デザイン学科ものづくりワークショップ

20 [NEWS & TOPICS]

・第39回コンクリート工学講演会において建築学専攻２年の河野圭一郎君と博士課程修了の荒巻卓晃君が年次論文奨励賞を受賞
・IAUD住宅学生コンペにおいて建築学科４年の高須信博君が入賞を受賞・JIA全国学生卒業設計コンクール2017において建築学科卒業の成潜魏さんが審査委員特別賞を受賞
・第７回JPM「夢の賃貸住宅」学生コンテストにおいて建築学専攻１年の増田俊君と横山大貴君が特別協賛会員賞を受賞
ほか

21 [Message from OB/OG]

vol.02 ジョブローテーションで３つの部署を経験 将来は技術と経験を備えた技術者に
銭 叶蓓（大林組/2013年修了）

22 [Architecture & Me]

vol.90 お陰様で創立30周年　text=金田勝徳 元特任教授

24 [Visit & Criticism]

学生建築探訪 vol.4「unico」「オブジェクトディスコ」へ行く！

SHUNKEN
2018 Jan. Vol.45 No.4
「駿建」
発行日：2018年1月15日
発行人：重枝豊
編集委員：佐藤慎也・宇於﨑勝也・宮里直也・山中新太郎・井口雅登・古澤大輔・堀切梨奈子・宮田敦典・廣石秀造
編集・アートディレクション：大西正紀＋田中元子/mosaki
発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14日本大学理工学部建築学科教室
TEL：03(3259)0724
URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp
※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで＜shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp＞

Visit & Criticism

学生建築探訪 vol.4

「unico」「オブジェクトディスコ」へ行く！

text = 飯嶋貴太（M１｜古澤・二瓶研）

「unico」
設計（共用部）：西田司＋森詩央里＋伊藤彩良＋大沢雄城／オンデザイン
設計協力・共用部家具設計製作: 秋吉浩気（VUILD）
住所：神奈川県川崎市川崎区日進町3-4
「オブジェクトディスコ」
設計：木内俊克＋砂山太一＋山田橋
住所：東京都中野区

学生建築探訪も第４回となるが、振り返ってみるとこれまで公共建築を２つ、商業建築を１つ取り上げたわけで、公共性を帯びた建築を取り上げていたことに気付く。意図していたわけではないが、僕ら学生でも見に行きやすい建築となると、必然的にそういった建築になってしまうのだ。そこで今回は、建築を通じて公共性について考えてみたいと思う。神奈川県川崎市にある「unico」と、東京都中野区にある「オブジェクトディスコ」という２つの建築を訪れた。

1

unicoは、元は工場街で、ここ10〜20年で住宅地へ転換したエリアに取り残された工場をリノベーションした建築だ（写真１）。スペースには、バスケットボールコートやシェアオフィス、社員寮などの多様なプログラムが入っている。建築全体は、築50年を超える既存躯体を活かすようにデザインされていて、結果的に建築が持つオブジェクト（物質）性をとても意識させられる空間になっている。これは近年のリノベーション建築に見られる傾向でもある。

2

建物全体に若者や家族連れがくつろぐとてもオシャレな空間という印象があり、ここに見えてくるのは健康で活発な、動的な公共のあり方だ（写真２）。多くの場合、建築が目標とするのはこのような動的な公共性だ。

では、動的な公共性は建築というオブジェクトが人々の動きを指定することで成り立っている、すなわちオブジェクトが「これをしなさい」の「これ」に人々の行動を規定する言葉を代入することで動的な公共性が得られていると考えてみよう。もともとオブジェクトは、指示語に代入することができる言葉をいくつか持っていて、デザインされることでそのうちのひとつを発揮する。例えば、箱は上に座ったり、何か入れたり、積み上げたりすることができるが、箱がテーブルの横に置かれたら人は自然とその箱に座るだろう。これは配置というデザインによって、箱が持つ「座る」という言葉が代入され、「座りなさい」と語りかける空間が完成するのだ。unicoでは、さまざまなオブジェクトによってさまざまな言葉が代入された空間が、動的な公共性をつくり出しているのだ。

3

一方、unicoが示した動的な公共性とは違う、静的な公共性のあり方を示してくれるのが「オブジェクトディスコ」だ（写真３）。中野区の繁華街から少し外れた住宅街に建つ集合住宅、その角地部分に設けられたオープンスペースであるオブジェクトディスコ。訪れると、小さな敷地にさまざまなオブジェクトが配置されている、とてもささやかな空間だった。どのようなコンセプトで設計されたのかは「新建築」2017年10月号を参照してほしいが、この作品は、空間が指示語を持たないようにオブジェクトが配置（デザイン）されている、と説明するのが良いように思う（写真４）。ここには、指示語が取り除かれた、ただの「しなさい」という語りかけがある。オブジェクトディスコにあるオブジェクトは、ひとつの言葉を発揮せず、従来持っているいくつかの言葉をひっそりとつぶやいているようだった。すると人々は、指示がないがゆえに行動が開放され、自由に振る舞うことができる。もちろん、ここで逆立ちをしよう！と思う人はなかなかいないだろうが、それすらも許されてしまうような雰囲気、すなわち静的な公共性を持っている面白い作品だ。ただ、オブジェクトはデザインによってすぐひとつの言葉を発揮してしまうので、このような公共性はささやかさとオープンスペースという機能、さらに設計者の工夫があって成り立っているのだと付け加えておきたい。

動的な公共性と静的な公共性について、オブジェクト性を感じる２つの建築から考えてみたが、僕はどちらが良いと言いたいわけではない。もし機会があれば考えてみてほしい。あなたはどんな公共性が心地良いか、あなたがいる空間はどんな公共性をつくり出しているのか、そして自分たちがどんな公共性を描くべきなのか。建築探訪は、建築を見て、考えることからはじまるのですから。

4

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。＜shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp＞